
ダウン、ダウン、アップ

羽天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダウン、ダウン、アップ

【Nコード】

N4607H

【作者名】

羽天

【あらすじ】

あなたに出会えたから……。私の世界は広がった。小さな出会いだけで大きな出会い。

自分は可愛くないから。

自分は暗いから。

ずっとうつむいて生きてきた。

その日、次の授業の教室に移動するために、胸に教科書を抱いてうつむきながら廊下を歩いていた。いつものように。

ひとつだけ違ったのは、その時まで名前も顔すらも知らなかった彼にぶつかってしまったこと。

反動でよろめいた私を彼は支えて、「ごめん」と謝った。
うつむいて歩いていた私も悪いのだ。

とっさに言葉の出なかった私はふると首を振った。気恥ずかしさと申し訳なさから、普段よりもっと顔をうつむけながら。

すると、彼は言った。

「目を見てあやまりたいから。顔をあげて？」

とても恥ずかしくて死にそうだったが、唇を引き結んで顔をあげた。初めて彼の顔を見た。

彼は私の顔をまっすぐ見て、もう一度「ごめん。」と謝ってくれた。

やっぱり私はすぐうつむいてしまった。真っ赤な顔を見られくなかった。

しかし私の長い前髪に彼の指が伸びてきて、そしてあっという間に前髪が綺麗にまとめられてピンでとめられた。

すーすーする額と彼の行動に驚いて、反射的に顔をあげると、彼は照れくさそうに笑った。

「いつも見てて気になったんだよね。せっかく可愛いのにうつむいてちゃ勿体ないよ。俺のピンだけど、絶対そのほうがいいと思うよ。俺も前髪邪魔でよくピンでとめるんだ。」

「・・・・・・・・くす。」

思わず、小さな笑みがこぼれた。

それかというものの、私はよく顔をあげる。

そして彼の姿を探すのだ。

彼が私を見つけて手を振ってくれる時。

私は短く切った前髪の下で、とびきりの笑顔になる。

(後書き)

ちゃんと投稿できるかどうかの試し書きとして書いてみました。稚拙ですが読んでいただけて幸いです。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4607h/>

ダウン、ダウン、アップ

2010年12月31日07時27分発行